

## 第102回全国高校サッカー選手権大会千葉県大会総評

### 【はじめに】

昨年と同じように真夏の酷暑を避けるため6月から1次トーナメント、9月から2次トーナメントが行われた。1次トーナメントと2次トーナメントの結果を踏まえて、10月7日から計43チームで決勝トーナメントが行われた。インターハイ予選の結果をもとに決勝トーナメントの抽選を行うため、今年度は早い段階で1部リーグ同士の熱い対戦もみられた。

ベスト4は、市立船橋、日体大柏、拓殖大紅陵、流通経済大柏の4校で、準決勝が柏の葉総合競技場、決勝がフクダ電子アリーナで行われた。

### 【今大会の振り返り】

今大会の特徴は、県リーグの3部リーグに所属する木更津総合と拓殖大紅陵と茂原北陵がベスト8に進出したことだ。千葉県は現在、5部リーグまでのカテゴリーで県リーグが行われているが、3部リーグからベスト8進出校が3校も出たことで、今後のリーグ戦のモチベーションにつながると同時に、千葉県の高校サッカーのレベルの高さを証明してくれた。トーナメントで結果を出すために、4月から開幕されている県リーグで改善や強化ができることは高校サッカーの特徴である。

準決勝の2試合では、合計8得点である。(市立船橋4点、日体大柏2点、拓殖大紅陵1点、流通経済大柏1点)8得点中6得点がセットプレー(PKも含む)からで、セットプレーの重要性が強く感じられる。デザインされたコーナーキックやロングスローなど、日ごろから練習時間を割かないとできないシーンが数多く見られた。市立船橋と日体大柏はクイックで相手の隙をつくFKから先制点を奪った。日体大柏の片野や、市立船橋の郡司のように速くて個で打開ができる選手がいると、必然とコーナーキックやフリーキックの回数が試合を通じて増すことになる。守る側のチームとしては、セットプレーの対策も充分必要だが、セットプレーの回数を最小限にすることも今後の課題である。

決勝戦は立ち上がりからお互いが高い強度で、決勝らしい試合運びとなった。市立船橋が前半のうちに3得点をとる展開となった。中でも市立船橋のFW郡司の個の高さと、MF太田のセカンドボールの回収、右サイドバック佐藤と左サイドバック内川の攻撃参加が数多く見られた。後半も郡司の相手の背後へ抜け出す技術と、高いシュート技術が際立ち、この試合FW郡司はハットトリックを達成し、5-1で市立船橋の優勝となった。日体大柏も個人技の能力が高い選手が多く、立ち位置をずらし、幅と深さを使いながらボールを前進させ、最後まで諦めずに戦っていた。大差がつくスコアとなったが両チームとも、ノージャッジで蹴り合いが続く決勝戦の展開とはならず、局面で数的優位を作りながらボールを保持し、前進させながらゴール前に侵入を試みる等、レベルの高い決勝にふさわしい試合内容であった。

攻撃では大会を通じて、個の止める・蹴る技術に加えて、プレッシャーを回避するための運ぶ(引き付け)技術とボール非保持の際のポジショニング能力の高い選手が多く見られた。また、サイドバックが攻撃に加わる回数が多く、オーバーラップとインナーラップを繰り返し、サイドハーフやFWと連携しながらペナルティーエリアに侵入していく回数が多かった。決勝戦では、前半10分までに市立船橋の右サイドバック佐藤が3回もペナルティーエリアに侵入し、先制点の起点となった。侵入後も、強引にボールを放り込まずに確実に味方へのパスを選択する技術も高かった。また、GKが起点となり攻撃を組み立てるチームが勝ちあがるごとに増え、チームの失点を減らすことも当然ながら、チャンスを自らのキックで作りに出していた。中でも日体大柏GK原田は安定したプレーでゴールを守り、高いキック精度で何度もチームの攻撃の起点となっていた。

守備では、FWから守備をさせ、ボールを中心に圧縮をかけ、意図的にボールを奪うことに徹底していたチームが多かった。ファーストディフェンダーだけではなく、セカンドディフェンダーと連携しボールの回収率を高めていた。後半になると、疲れが見え陣形をコンパクトに保つことが難しい局面もあったが、交代選手やシステムを変えて守備の強度を更にあげるなど、組織的な守備を持続していた。所属リーグの違いで守備戦術の成熟度や強度に差が出た印象もある。優勝した市立船橋は、3試合で11得点という驚異的な攻撃力であったが、その攻撃力を支えたのは個の守備意

識と組織的なボール奪取力である。全体の課題としては、セットプレー時に、相手に競り負けたというよりも、マークに誰もついていなくてフリーにしてしまった（ボールウォッチャー）シーンが多かったことが挙げられる。流れの中でも、ゴール前に守備の人数はいるが、マークの分担が不明確で制限がかけられずに崩されるシーンも多かったので、5バック等にして人数を割くことよりも誰につくか、どこを守るのかを今後共有しながらトレーニングすることが求められる。

#### 【大会運営について】

試合の技術や戦術面以外で、今年の選手権と変わったところは、声出し応援が可能になったことである。試合の雰囲気はやはり、応援があることで明るくなり、緊張感が増し、戦う選手のエネルギーとなる。1次トーナメントから決勝まで共通していることだが、試合に出られていない選手の関わり方も非常に素晴らしかった。試合前から、応援等で自チームをサポートし、試合が終われば対戦相手を称えて会場の撤収作業に取り組むメンバー外の選手があってこそこの高校サッカーであると気づかされた大会であった。試合も応援もサポートも含めて、高校生の本気に心動かされた大会であった。また、会場役員や審判など多くの方々協力によって6月から始まった今大会も無事に終わることができた。大会運営に携わっていただいた方々に感謝の意を表すとともに、市立船橋高校の全国大会での活躍を期待し、総評とさせていただきます。

千葉県立船橋芝山高等学校 菊野 将史